
君と行く明日。

和田梨樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と行く明日。

【Nコード】

N1724B

【作者名】

和田梨樹

【あらすじ】

ある日、僕は彼女に出会った。その彼女に僕は恋をした。これがすべての始まりだった…

第一話 彼女と僕（前書き）

現在、色々なジャンルで書いています。読んでいただければ幸いです。

第一話 彼女と僕

僕は思う。あの時、彼女に出会わなかったら、今の自分はいなかったと。

彼女がいなければ、僕は僕でいらなかった。

人が聞けば、大げさな話だとも思うかもしれない。だが少なくとも、僕にとってはそうではなかった。そう、あれは1ヶ月前のことだ……

その日、僕は真夏の太陽の下を自転車で疾走していた。

別に用事があったわけではなく、ただいい天気だったから、僕はなんとなく、午後から愛車に乗り、そこらをつろつろしてみようと思ったのだった。

ここは井坂町に流れている侘島^{たしま}川の河川敷である。この川は長く、河川敷もそれだけ続いている。だから、ジョギングをする人や、僕のようにサイクリングを楽しむ人が、この河川敷には多く訪れる。

一番軽いギアで走っている僕は周りを見渡した。川はゆっくりと海に向かい流れている。周りには犬の散歩をしている初老の男性や、元気にはしゃいでいる子供達。それに……？

僕はブレーキをかけ、自転車を停止させ、そして先ほど気になった人をもう一度見る。

舞を舞っている少女が、そこにいた。

彼女と僕の距離は10メートルほどだろうか。少々遠いが、舞っている彼女は美しく見えた。

僕は近づいてみることにした。もっと近くで、彼女の舞が見たかったのだ。

僕は5メートル程まで近づく。彼女は舞に集中していて気づかないのか、ただ一心不乱に曲に合わせ舞っていた。曲は日本舞踊なのだろうか、琴のような音が、河川敷の限られた空間に響いていた。僕は近くのベンチに座る。そして彼女に見とれていた。

曲が終わる。彼女はふつつと息をつくとき、こちらを見た。彼女は驚いているようだ。それはそうだろう、見知らぬ男がベンチに座り、自分の舞を見ていたのだから。

僕は拍手をした。彼女の舞を心から素晴らしいと思ったからだ。僕は口を開く。

「綺麗な舞を見せてくれてありがとう」

彼女の顔が赤くなる。僕はそんな彼女を、かわいいと素直に感じた。

「へえ、お嬢様なんだ？」

「そう言われるのは、好きじゃないんですけど……まあ、その通りです。」

あれから。僕と彼女は雑談をしていた。彼女の名前が、島津麻里しまづまりということ。彼女が僕の一歳年下だということ。それに彼女がなぜ、日本舞踊を舞っていたのかを聞いた。

「おばあ様が、日本人の嗜みの一つだと言って習わせるんです」

まあ、本人を見る限り、自分なりに楽しんでやっているようで、やらされているというわけではなさそうだ。

「ところで、あなたの名前は？」

おっと、そういえば彼女に名前聞いたといて、僕の名前を教えてなかったな。

「僕は萩原秀二。この近くにある優成高校の二年生だよ」

「そうなんですか？私も同じですよ」

「あれ？友愛学園ゆうあいじゃないの？」

友愛学園というのは、いわゆるお嬢様学校である。優成高校は、至って普通の男女共学校で偏差値やスポーツの成績が高い訳でもない。

お嬢様の彼女が、この高校に来るメリットはないはずだ。

「いえ、おばあ様が社会勉強だからと言って、私を友愛学園に入れなかったんです」

ふむ。なかなか、まともな考えだな。お金持ちにしては珍しい。

「じゃあ同じ学校だったなら、どこかで会ったことがあったかもしれないね」

「覚えて…ないんですね」

「えっ、なにを？」

「私達、面と向かって会ったこと、あるんですよ？」

「……………」

全く覚えてなかったりして。

それから彼女は、僕とどこで会ったかを話した。どうやら、今年の四月に、僕が図書室で辞書を探している時、彼女が本を探していて、場所がわからずに困っていたところを僕が助けたらしい。

「そうだったんだ。ごめん、気づかなくて」

「いえ、いいんですよ。あっ、今何時か分かりますか？」

僕は携帯を見た。

「三時半…つてとこかな」

それを聞いた彼女はえっ、と小さく声をあげた。「ごめんなさい。」

私、これから行くところあるので、これで失礼します」

彼女は曲を流していたCDラジカセを持ち、立ち上がった。

「それは残念だな」

僕は珍しく、本心を口に出した。正直彼女は、僕のタイプだ。肩に掛かる程度の黒く美しい髪、背は僕より少し低いぐらい。肌も白く、先ほど真っ赤になっていた頬も、健康的に少し赤い程度だった。ちなみにスタイルは僕は気にしない。服装は、今はジャージだが、それは真夏に舞の練習をしていたからだろう。

「私と…」

「ん…？」

彼女が何か言った気がした。だが、声が小さくて聞こえない。

「どうしたの？」

僕は聞いてみた。

「私と…また会いたいですか？」

彼女は小さく、消え入りそうな声でそう聞いた。顔はまた真っ赤になっただけ。

「僕はまた会いたいと思ってる」

これまた、僕は本心で彼女に答える。

「そう…ですか」

そう呟いた彼女は、どこか嬉しそうだった。ところで、時間は大丈夫なのだろうか？

「あつ、本当にそろそろ行かないと…」

「残念だけど…また会おう」

僕は笑顔で言う。僕は笑顔を意図的にすることはないので、これも珍しいことだった。

「はい、また会いましょう」

彼女は魅力的な笑顔でこう言って、歩いて去っていった。

「ふう…緊張した」

基本的に僕は人と話すのは苦手である。それがタイプの女の子になれば、その緊張感は何倍も増える。しかし、彼女と話すためには堪えるしかなかった。

「イタツ…はあ。腹が痛い」

彼女と話している間は、堪えられた腹痛も今は堪えきれない。僕は近くの公衆トイレに、腹を抱えつつ入っていった。

……彼女、やっぱりかわいいな。

そんなことを思いつつ。

第一話 彼女と僕（後書き）

読んでいただいた方に、感謝申し上げます。これからもよろしくお願ひします。

第二話 お決まりのパターン

あの日は土曜日だった。だが、彼女ー麻里はなぜ、あんな所で舞を舞っていたのだろうか？ 彼女はお金があるから、練習所のような所もあるのではないか。僕は土曜日の夜、ふとそう思った。同時に、今度会ったら聞いてみよう、と思ったのだった。

僕はただ彼女に、もう一度会いたいただけなのかもしれない。

土日の二連休を経て、月曜日。今日から、また一週間が始まる。

僕は起きると、すぐに階下に降りていった。リビングを覗くと、そこには猫が一匹。名前はサラ。ちなみに名前は僕がつけた。由来は毛並みがサラサラしているという、ひどく単純な理由だ。

サラは青色のゴムボールで遊んでいた。僕は中に入り、サラを抱きかかえてやった。サラは僕に慣れているから、暴れずに大人しく抱かれていた。僕はサラをダイニングまで運び、ご飯を食べさせることにした。

…いや、もちろん僕も食べるが。

ダイニングには、僕の兄である、萩原秀一がオヤジみたいに新聞を読んでいた。この秀一兄さんは、近くの教育大学の二年生である。将来は、国語の教師になりたいらしい。

「秀一兄さん、おはようございます」

「ああ。おはよう、秀二」

秀一兄さんは、新聞から顔を上げずに言う。本当にオヤジっぽい。とりあえずサラを膝の上に乗せ、イスに座って、食事が運ばれてくるのを待つことにした。

10分待ったのに、何も出てこない。…おかしい。秀一兄さんはトリストを頼張っているのに、なぜ僕には何も出てこない？ 僕は、

サラを椅子の上に乗せ、母がいるはずのキッチンに入ってみた。

誰もいない。テーブルに紙が乗っている。僕は手に取って読んでみた。

『秀二へ。私は実家に帰ることにします。あなたのお父さんと、やって行く自信がなくなりました。あの人のことをよろしくね 母より』

……………えっ？

「秀一兄さん」

僕はやつとのこととで、声を出した。「うん？ どうした、秀二」

「母さんは出ていったのですか？」

「ああ、らしいな。俺も起きて、その紙を見た時は驚いたさ」

「連れ戻しに行かないんですか？」

秀一兄さんは、ため息をついて、

「これは俺達が行ったところで意味ないだろう。父さんが行かないと、意味がない。まったく…あの父さんのことだから、また浮気でましたんだろう」

呆れ混じりでそう言った。

僕の父親、萩原秀三はぎはらしゅうへいは、どうしようもない人である。

金こそは、ある程度あるが、浮気癖が非常にひどく、今までに何度、離婚騒動があったかわからない。しかし、毎回母は浮気を許し、二度としないことを誓わせる。しかし父はそれを毎回破り、浮気を繰り返した。母は可哀想な人だと思う。たぶん、浮気を繰り返す父に愛想が尽きてしまい、実家に帰ってしまったのだろう。

「とりあえず学校行かないと…って秀三は？」

もちろん、父親のことではない。僕の弟が父と同じ名前なのである。「ああ、秀三なら、もう起きてる。今は部屋で、学校行く準備して

るよ」

まあ、秀三も母がいないことは知っているのだろう。

「パン、焼いといたから食っとけ」

ダイニングのテーブルの上に、トースト二枚乗った皿があった。僕はその内の一枚を取り、マーガリンを付けて食べる。

「ところで父さんは？」

「最近帰ってきてないな」

父は基本的に、家に帰ってくるのが稀で、最後に家に帰ってきたのは、確か3ヶ月前だったはずだ。なのになぜ、母はいきなり、父とはやっていけない、などと言ったのだろうか？

「おい。とつとと飯食わないと、遅刻するぜ？」

「ああ、うん。わかってます。サラにご飯あげてください」

僕は思ったことを、記憶の片隅に留めておいた。

サクツ、とトーストを食べる。……少し焦げていた。

自転車で家を出た。まだ静まっている住宅街を疾走する。ここから学校まで、約20分。今から行ったら、ちょうどいい時間になるだろう。

秀三は家を出ただろうか。中二なのだから、真面目にやって欲しい、と思う僕。麗しい兄弟愛である。

秀一兄さんは午後から講義のはずだから、今はどうでもいい。とりあえず、僕は学校に向かって、自転車を漕いだ。

学校に着くと、周りには途中まで、バスで来たと思われる、徒歩の生徒達でいっぱいだった。僕はそんな中を自転車から降りて歩いていた。まだ朝だから、そこまで暑くはないが、軽く汗をかく程度に暑かった。

肩を叩かれた。振り向くと、そこには僕の友人、あまのはやと天野速人が微笑んで、立っていた。

「おはよう。速人」

「おはようさん」

速人は朝から調子が悪そうだった。

ここで速人について、説明しておこう。速人は僕が中学生になった時、同じクラスにいた。声を掛けてきたのは、向こうの方からだった。

「お前、俺のこと、どう思う？」

かなり唐突だった。だが、僕は冷静に答えた。

「そうだな…見た目なら、ヤンキーに見えるな。いや…チンピラかな？」

今の速人は爽やかな好青年だが、昔は襟足も長く、ワックスで髪をツンツンに立てていたのである。

「やつぱりか。お前って、外見で人を判断するようなやつか？」

「いや。僕は人間は内面が重要だと思っている。だからお前みたいに、ヤンキーっぽく見えても、僕は他の人と変わらずに接するだろうね」

僕のそのセリフを聞いた速人は、友達になろうと言ってきた。僕はもちろんOKした。

速人は面白いやつだった。話してて、話のネタが尽きることもないし、語りが上手く、聞いてて飽きない。感じも良く、あつという間に速人はクラスの中心になったのだった。

「つーか、今日の授業ってめんどくね？」

「そうかな？ 普通だと思うけど」

「お前はどこがおかしいんだよ。今日は数学に英語があるんだぜ？ 最悪だよ」

「僕はどっちも好きだから…」

「お前、人間じゃねえよ」

そんなどうでもいい話をしていると、自転車置き場に着いた。速人は先に行き、僕は自転車を置いて、教室に向かった。

朝のホームルーム。先生が連絡事項を話していた。すると、

「ここで、転校生を紹介する」

…この時期に転校生？ 有り得ないだろ、普通。作者、少しは考えてください。

「よし、入ってきてくれ」

入ってきたのは、麻里だった。

……ん？ 僕より、年下じゃなかったっけ？ というか、なんで転校生なんだ？ 彼女は最初からこの学校に通っていたはずだ。

「皆さん、はじめまして。島津麻里といいます。これから迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

彼女の張りのある声が、教室に通る。僕以外のクラス全員が、歓迎の拍手を送った。

「島津さんは、他県の高校から転校してきた。みんな仲良くしてやってくれ。ところで席だが、萩原の隣になるからな」

…お約束だ。そして、クラスの男子から不平があがる。

「センサー、俺の隣にしてくださいよ。萩原の隣は危険っすよ」

そう言ったのは、速人だった。自分勝手なやつだ。ほら、お前の隣の菅原さんが、ちょっと不機嫌になってるぞ。菅原さんは速人のこと、好きだからなあ。

「バカ、お前の方が危ないだろうが。萩原はまだまともだ。」

まだって…僕はまともじゃないのだろうか。「大丈夫。アンタはまともだから」

僕の前の白峰恭子しらみねきょうこが言う。

「ありがとう。少しは救われた気分になるよ」

僕は礼を言った。

「じゃあ、島津さんは萩原の隣に座ってくれ。わからないことがあ

「つたら、萩原に聞いてくれ。あいつなら、何とかしてくれるはずだ」
「はい、わかりました」

無責任なことと言わないでくれ、独身のさめはらかじき鮫原梶機先生。ちなみに数学教師である。島津さんが、窓際の僕の隣の席に座る。

「よろしくお願いします」

「……よろしく」

互いに挨拶を交わす。彼女は半分笑っていた。それを見た僕は外に目を向けた。

彼女に会えて嬉しい。

ただ、そう思う僕であった。

第二話 お決まりのパターン（後書き）

今回も、読んでいただいております。次も、出来るだけ早く完成させたいと思います。

第三話 真夏のカレー（前書き）

これから、暦では冬に向かっていきますが、この話は真夏の話です。
夏だと思いながら、読んでみてください。

第三話 真夏のカレー

昼休み。僕は速人と、昼御飯を食べに行くことにした。

「速人、昼どうする？」

僕は速人の席まで行って声をかける。

「うん。学食行くか」

「そうだね」

僕と速人は、教室を出ようとした。すると、僕の肩が叩かれた。振り向くと、そこには島津さんがいた。

「どうしたの？」

僕は聞いた。すると彼女は、

「一緒に…お昼ご飯食べませんか？」

少し顔を赤くしながら、そう言った。

「いや、僕は速人と食へに行くから…」

僕は断ろうとした。先約を優先するのは、当然なことだと思ったからだ。

「あゝ、悪いな秀二。俺、用事思い出した」
いきなり速人が言った。

「えっ……」

「そんなわけで、俺は行く。さらばだ、秀二！ その娘と仲良くやれよ！」

速人は、そう言って去っていった。その後ろ姿は、どこことなく悲しげに見えた。

というか…あいつ、何か勘違いしてるような……

「あの〜」島津さんが様子を伺うように言う。

「あ、うん。速人もどこか行っちゃったし、一緒にご飯食べに行かない？」

速人がいないなら、島津さんとお昼をとんでもいいだろう。そう思い、逆に誘ってみた。

「え、あ、はい。ご一緒しましょう」

島津さんは笑顔で頷いた。

そして、僕と彼女は学食に行くために教室を出た。

ここで先程、走り去った天野速人にスポットを当ててみよう。

俺は走っていた。ああ、目から何か出てるよ。涙だな、こりや。

秀二のやろう、麻里ちゃんといつの間に、良い仲になっちまってるんだよ、あの裏切り者が。

そんなことを考えつつ、たどり着いた先は屋上だった。

屋上というと、生徒に開放されていないケースが多いのだが、この学校は開放されていて、生徒達の憩いの場になっている。しかし、真夏の太陽が降り注いでいる屋上に、生徒の姿は見えなかった。まあ……暑いからねえ。

「ま、そりやそうだろう……」

一人になるには好都合だ。俺はそこら辺に寝転がった。

「はあ……」

溜め息が出た。

秀二は、中学の時から親友だ。まあ、向こうはどう思っているか知らないが。親友に彼女が出来たことは、実に喜ばしいことだ。でも、俺が一目惚れした娘じゃなくてもいいだろう？

「はあ……」

授業、さぼろうかな……？　なんか面倒くさくなってきた。昼寝でもしようと、そのまま目をつぶった瞬間、頭上から声が聞こえた。「アンタ、何してんの？」

「うわっ！」

俺は目を開けた。見えたのは、青い空と俺を覗き込む幼なじみの顔。

白峰恭子。それがコイツの名前だった。

10年くらい前の話だ。俺が1人で砂場で遊んでいると、後ろからトントンと肩を叩いたやつがいた。振り向くと、そこには同じ年くらいの女の子がいた。

「なんか用？」

俺は無愛想に聞いた。あの時の俺は友達と喧嘩していたので、虫の居所が悪かったのである。

「アンタ、何してんの？」

彼女はなぜか知らないが偉そうだった。だから、俺は無視して砂遊びを続けようとした、が彼女は俺の手をつかんで、強引に俺を立たせた。

「何すんだよ」

俺は文句を言う。しかし、彼女はそれを無視して言った。

「ほら、かくれんぼするわよ」

当時、俺達がやっていたかくれんぼは、ハードなところがあった。それは、見つかった者は砂場に埋められるというものであった。つか、こんなルール作ったの誰だよ……

まあ、こんなルールがあったから、俺が邪魔になったのだろう。そのついでに、俺を参加させるつもりなのかもしれない。当時の俺は、そんな子供らしからぬことを考えた。

「嫌だよ。オレはここで遊ぶんだ」

俺は彼女に意地悪く言った。ただ彼女を困らせたかったのだ。

しかし、直後に俺は後悔した。そして、同時に理解した。彼女に余計なことは言わない方がいい、と。

「はあ？ アンタがそこにいるせいで、砂場に人を埋めらんないんじゃない？ 一言で言うと、アンタ邪魔なのよ！ だけど、私って優しいから、仲間に入れてあげようとしてあげてるのに、何よアンタの態度！ ああ、もう腹立つわね！ みんな〜！」

彼女は俺を散々に言った後、かくれんぼに参加するメンバーをこの場に呼んで言った。

「コイツ、埋めるわよ！」

「……………」

みんな、不思議そうな顔をして黙った。それはそうだろう。いきなり、埋めると言われてもなあ……

「何してんの！ 埋めないと殺されるわよ！」

ねえ、誰に？ もしかして俺ですか？

「…………埋めようぜ」

誰が言った。その声につられるように、他のやつも段々乗り気になっていく。

俺は彼女を振り切って、逃げ出そうとした。しかし、彼女の力は意外と強く、離してくれない。無理やり離そうと思えば離せたが、女の子にそのような態度を取れない俺だった。

そして、俺は砂場に埋められた。今でも時々夢に出る。俺を見て、笑っている彼女の顔が……

もう分かっていると思うが、『彼女』というのが恭子である。こいつは昔から変わらないのだ。

「何の用だ、恭子？」

俺は寝たまま恭子に言った。

「アンタに用がある訳じゃないわよ。私はここで、ご飯を食べようとしただけ」

恭子は無愛想に言った。

「なら、声掛けんなよ。俺は1人になりたい気分なんだ」

俺はそう言って目を閉じた。こんな時に恭子と話すと、余計ネガティブになる。

「まったく、アンタって昔から変わらないのね」

ああ、恭子も昔のことを思い出していたのか……

そう思いながら眠りについた。恭子が何か言っているような気がしたが、気にしないことにした。

では、再び視点を萩原秀二に戻そう。

僕は学食名物、カレーライスの中辛を食べていた。隣には、カレーライスの甘口を食べている島津さんがいた。

どうでもいい話になるが、ここの学食のカレーライスは種類が豊富である。

まあ例を挙げるならば、ポークカレーにビーフカレー、チキンカレーなどである。しかも辛さの種類も、激辛 辛口 中辛 甘口 激甘という順で存在している。そのせいで、学食はカレーの匂いがすごい。見渡してみると、周りには男子連中しかない。

……確かに、女の子はカレー臭がキツイ学食にはこないよなあ……

「ねえ、島津さん？」

彼女は食べるのを中断して、僕の方を見て応える。

「なんですか、萩原さん？」

「ごめんね、こんなとこに連れてきちゃって」

僕は謝る。しかし彼女はそれを制して言う。

「とんでもないです。私、カレーは好きですから、ここに連れて嬉しいです」

「そう言ってくれるなら、僕も嬉しいけど……」

実際、まったく嬉しくない。自分の選択ミスに、激しく後悔する僕。

はあ……何してるんだ、僕。せっかく島津さんと一緒に昼食をとっているというのに、カレー臭がキツイ学食を選んでしまうとは……
購買で何か買って、屋上で食べればよかった。この時間なら、暑いから誰もいないだろうに。

というか、いきなり2人つきりになってどうするんだ？ 逆に話しづらい気がする。

「萩原さん？」

色々と考えていた僕を、島津さんの声が現実を引き戻す。

「うわっ！ ど、どうかした、島津さん」

自分の世界から帰ってきた僕は、慌てて聞き返した。

「いえ、大したことではないんですが、次の時間何かなあって思ってた」

「あゝ、僕の嫌いな国語だよ」

「国語、嫌いなんですか？」

「うん、まあ……ね」

僕にとって、国語は文法が難しく、英語に比べて分かりづらい。

いや、普通の人は英語の方が苦手だろうけど。

「じゃあ、好きな教科は何なんですか？」

島津さんが僕に質問する。

「僕は数学と英語が好きだよ」

朝、速人に言っただようなことを言う。

「……変わってますね」

反応も、速人と似たようなものだった。

……ちよつとショックだ。

話していて、気づかなかったが、席が空くの待っている人が多い。これはさつさと席を空けるべきだろう。

彼女のカレー皿を見ると、もう食べ終わっていた。

「そろそろ行こうか？」

僕は島津さんにそう言った。

「そうですね。待っている人もいますよ」

僕と島津さんは、皿を学食のおばさんの元まで持っていく、学食を後にした。

そういえば……今日は腹が痛まなかった。たぶん、彼女と顔見知りになったからだろう。僕の腹は、見知らぬ人と話すと痛くなるからなあ……要するに、困った腹なのである。

放課後、僕は特に用事もないので帰ることにした。教室を出ると、

速人に出くわした。

「ああ、速人。今日はどこでサボってたんだ？」

速人は午後の授業に出ていなかった。速人がサボるのは、そんなに珍しいことではないのである。

「ああ？ ああ…屋上だよ。ほら、顔、焼けてんだろ？ つい、うとうとと、寝ちまつてたんだ」

顔を見ると、確かに少し黒くなっていた。

「でもさ、何でわざわざ暑い屋上で寝てたんだ？」

僕は気になったことを聞いた。

「なんとなくだよ、なんとなく。暑いのは苦じゃないし」

「そうだった？」

速人は夏になると、暑い暑い、と騒がしかった気がする。

「まあ、そういうことにしといてくれ。おっと、部活行かないと悪い、俺行くわ」

「あ、うん。じゃあまた明日」

速人は去っていった。バスケット部なので、体育館に行くのだろう。

僕は速人が角を曲がるのを見届けてから、昇降口に向かった。

僕はベッドに体を投げ出した。

帰ってきてから、いつも母がやっていた家事を僕がした。正直、母の偉大さを思い知った。ご飯づくり、洗濯、掃除などを、いつも1人でやっていたということが信じられなかった。

この時間、兄は家にいない。近くのビデオ店でバイトしているのである。弟は野球部に入っていて、つい先程帰ってきて、ご飯を食べると寝てしまった。まあ、忙しいから仕方ないだろう。僕は何もやってないから、家事をやるのが、ちょうどいいのかもしれない。

「そういえば、宿題あったっけ…」

確か、数学の教科書からだったような…

そう思い、教科書を取ろうとして、立ち上がると、机の上に乗っていた携帯が震えた。

「……？　こんな時間だつてのに、誰だ？」

ぼやきつつ見てみると、速人だった。電話に出る。

「よう、秀二。元気してるか？」

速人の軽い声が聞こえてきた。

「元気じゃない、じゃあね」

僕は電話を切ろうとした。すると電話から、慌てた声が聞こえた。
「待て待て待て待て！　まだ切るなって。聞きたいことあるんだからさ」

「じゃあ、早くしてくれ。僕は死にそうなんだ」

僕の臉は、今にも閉じてしまいそうだった。

「わかったよ。正直に答えてくれ。お前と麻里ちゃんって、付き合ってるのか？」

軽く目が覚めた。島津さんと僕が付き合ってるだつて？

「速人、それはない。付き合ってるわけないだろう。島津さんとは、今日初めて会ったんだぜ？　いつそんなチャンスがあつたんだよ」
僕が言うと、速人はほっとしたように言った。

「やっぱ、そうだよなあ。付き合ってるわけがないよな。うん。まあ、それだけだ。じゃあまた明日な」

勝手に切られた。ツーツーと音がする。僕は電源を切って、宿題もやらずに、寝ることにした。

まったく、速人は何を言っているんだか。僕が島津さんと付き合っているわけないじゃないか。向こうは、僕のことなんか、気にしてもいないだろうし。でも……

僕は眠りにつく直前に思った。

島津さんと恋人同士になれたらいいな、という夢のようなことを。

第三話 真夏のカレー（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございます。これからも精進していきますので、皆様よろしく願います。

第四話 キャンパスライフ（前書き）

今回は少し更新が遅れてしまいました。とりあえず読んでみてください。
さい。

第四話 キャンパスライフ

「で、何を忘れたって？」

僕は秀一兄さんに聞き返す。受話器の向こうの兄は答えた。

「今日、締切のレポートだ。たぶん机の上に上がってるはずだから、こっちまで持ってきてくれ」

それを聞いた僕は、電話を切りたくなつた。しかし、兄が困っているのに見捨てるのは気が引ける。そう思い、結局僕は渋々承諾した。それを聞いた兄は僕にお礼を言うと云って電話を切った。

…まあ、期待しないでおう。

僕は居間を出ると階段を登り、兄の部屋に入ると、思わず立ちすくんだ。理由を一言で言くと、その部屋が散らかっていたからだ。

確かに母が出て行つてから、家事をしているのは僕だが、兄弟の部屋はまったく掃除していなかった。

だからといって、ここまで汚くはないだろう。床にはマンガが大量に散らばっていて、足の踏み場がない。衣服もそこらへんに放り投げられている。換気もしていないのだろう、随分と埃っぽい。これを見て、母が僕達兄弟の部屋もしっかり掃除していたの思い出した。僕もするべきなのだろうか。

まあ、それは後で考えるとして、今は兄のレポートを探さないと

……

僕は床の本を一片付け、机までの道を作る。そして、机の上にレポートを発見した。

「これか……」

タイトルを見ると、『地球温暖化の抑止法』と書いてある。僕は興味を持ち、レポートを見てみることにした。

『今、この世界は危機に晒されています。地球上の温度は上がる一方で、このままでは様々な自然災害が起こり、人類……いや、全ての生物が死滅してしまうかもしれません』

うん、出だしはまともだな。

『では、地球温暖化を止めるにはどうするべきでしょう。私は考えました。人間がこの世からいなくなればいい』

何かおかしくなってきた…

『人間さえいなくなれば、残るのは他の生物たちです。彼らだけなら、これ以上地球温暖化が進むことはありません。では、如何にして人間を滅亡―』

僕は読むのをやめた。兄は頭がおかしいんじゃないかと思わざるを得ない文章だった。

このレポートを提出する兄に幸運あれ。

今日は土曜日。島津さんに初めて会ったのは、一週間前になる。そして、僕は兄の通っている教育大学に来ていた。現在、12時35分。ちょうど昼休みくらいだろう。僕は校門前で兄にメールで着いたことを伝えた後、敷地内に入り、近くのベンチに座って待つことにした。

少しして、兄の声が聞こえた。

「おい、秀二」

僕は声がした方向を向いた。そこには兄の他に、もう1人いた。

女の人だろうか。いや、男かもしれない。中性的な顔つきをしていて、どちらかはわかりかねる。髪から判断しようと思ったが、今の時代、男が長髪にしてもおかしくないもので、判別しづらい。だが、この人が男だろうが、女だろうが、美しいことに変わりはない。だった。

……まあたぶん女の人だと思うけど。

「悪かったな、秀二。家のことで忙しいのに」

兄が僕を労うように言う。

「いや別にいいよ。ちようど外に出たかった頃だしさ」

無論、嘘である。はあ…休日はゆっくりしたかったのに……

「そつか…それならいいが」

兄はそう言つて、僕を見る。そして僕が、自分の隣にいる人を見ているのに気づいたようだった。

「おお、紹介してなかったな。こいつは、椎名景だ。しいなひかり時々、女に間違えられるんだが、一応男だからな」

男だったか：うゝん、女の人だと思つたんだけどな。

景さんが僕に話しかける。

「へえゝ、君が弟さんかゝ。話は秀一から聞いてるよ。よろしく、秀二君」

「こちらこそ、不出来な兄がお世話になってます」

僕はまともな挨拶を返す。

「おいおいひどいな、秀二」

兄が何か言っているが気にしない。

「いや、それはもうわかつてるんだけどさ」

「景までそんなことを言うのか：」

兄は落ち込んでいた。景さんはそれを無視して、話を続ける。

「そつえば秀一のレポート、持ってきたんだよね？」

「ええ、しっかりと持ってきてます」

「ちよつと貸してくれるかな？」

僕はレポートを渡した。景さんが内容を確認して一言。

「書き直せ！」

まあ普通の人なら、そう言うだろう。

「なぜだ？ 俺は至つて真面目に書いたぞ」

「地球のこと考え過ぎだろ：」

景さんは頭を抱えていた。

「ごめんなさい」

とりあえず、謝つておいた。

「いや、秀二君は悪くないよ。すべては秀一が悪いんだ」

ああ、兄は良い学友に恵まれたようだ。景さん、これから兄をよろしく願います。

景さんは兄を連れて、図書館に戻っていった。どうやら、無理やり書き直させるみたいだった。大学生は大変だな、とかなんとか思っている、景さんが戻ってきた。

「はあ、何とかなりそうだよ」

景さんは憔悴しきっていた。僕は聞く。

「兄一人で大丈夫なんですか？」

今までの経験上、兄が素直に言うことを聞くとは思えないのだが。

「ああ、その辺は問題ないよ。レポートを書き直せば、今度、昼飯をおごってやる約束をしたから。意外と秀一は単純なんだよね」

「でも、物事に集中し過ぎて、その約束の内容を忘れちゃうんですよね」

そうそう、と景さんが苦笑する。

現在、兄の大学の成績はほぼ『良』だが、高校時代は学校全体でベスト10に入るほど頭が良かった。それは兄が遊んだりもせず、勉強しかしていなかったためである。まあ、努力の賜物というわけだ。

しかし、大学1年の時に、兄の集中の対象は勉強から、遊びに変わってしまったのである。遊びに集中してしまった兄の成績が下がるのは当然だった。

遊ぶのは簡単だが、遊びを止めるのは難しいということが、兄を見るとよくわかる。

「ちょっと気になったんだけど、秀一の記憶力って、悪過ぎじゃないかな？ 秀一には直接聞いたことはないんだけど、秀二君はどう思う？」

景さんが僕に質問してくる。僕は少し迷う。話すべきなんだろうか……さっきまでは忘れっぽいで済まされたけど、今はそれでは済まない気がする。

「うん？ なんか変なこと訊いたかい？」

「いや、そんなことないんですけど……兄からは本当に聞いてない

んですか？」

景さんは首を振る。

兄が教えてないのに、僕が教えてしまっているのだろうか？僕はそう思い、口を閉ざした。しかし、景さんはそんな僕を見たにも関わらず、さらに訊いてくる。

「秀一のこと、教えてくれないかな？」

「……」

僕は黙っている。しかし、景さんはさらに続けて言った。

「親友だから、聞いておきたいんだ」

この人には。この人には、話しても良いんじゃないか。ただそう思った。

僕は兄に何か言われることを承知で景さんに話しておくことにした。

「兄は…後天的な記憶障害者なんです」

「……」

僕がそう告げても、景さんは黙って聞いていた。僕は話を続ける。「兄が障害を負ったのは、小六の時です。ある日、兄は家の近くの公園で遊んでいて、アスレチックジムに登っていました。一番上まで登った兄はそこから滑り落ちて、頭を打ってしまったんです」

僕は一息つく。しかし、すぐに話を進める。

「まあ、たまたま近くを通りがかった、僕の家の方に住んでいる方が、兄を見て、すぐに救急車を呼んでくれたんですけど…」

「秀一は大怪我でもしたのかい？」

「いえ、ただの脳震盪で、入院もせずに帰ってきましたね」

その時のことは覚えている。兄と母が帰ってきた時、僕は玄関で出迎えた。兄の頭には包帯が巻かれていて、とても痛々しそうだった。

「兄はその頃から、記憶力が悪くなりました。例えば、僕とつい先程した約束を忘れたり、母に頼まれた買い物をするのを忘れるとか

です。小一なら、わからなくてもありませんが、小六の兄ならば、異常でしかありません。母は兄を精神科に連れていきました」

「そして記憶障害だと……」

「まあ、厳密に言うとは違うんですよ。物事を『記憶』できなくなつたのではなく、物事に『集中』し過ぎてしまい、他の事が脳から消えていってしまうんです。でも都合の良いことに、人の名前や外見くらいは覚えているみたいですけど」

「本当に都合良いね」

景さんが言うが、別に僕はどうでも良かったので答えなかった。

こんな作者の都合に決まってるじゃないか。そう思いつつ、話を修正する。

「兄は猛勉強を始めました。一つのことを勉強に絞ったんです。その勉強量に比例して、兄と僕らが遊ぶことは、次第に無くなってきました。それに、友達もだんだん減り、最終的には兄をいじめたりするようになりました」

景さんの表情が少し暗いように見えたが、僕は構わず話を続ける。

「兄が遊び始めたのは、大学生になってからです。まあ、気の合う友人でも出来たんでしょう」

「うん？ それってボクのことかな？」

景さんは確認するように聞いた。僕は無言で頷き、

「たぶんそうでしょう。景さん、こんな兄でも親友でいてあげてくれませんか？」

そう締めくくった。

景さんは黙っていた。やはり言わない方が良かったのか……僕が後悔しかけた時、景さんは口を開いた。

「秀二君、それは無理だよ」

「そうですね……やっぱり……」

僕が落胆した声で言うと、景さんは笑顔で続けた。

「だって、僕と秀一は一生親友なんだからさ。『いてあげて』とか言われても意味ないよ」

僕はこの人に謝りたくなかった。一度だけとはいえ、疑ってしまったことを。まったく自分で自分を情けなく思う。

「バカだなあ、秀二君は。僕がその話を聞かされて、友達を辞めたりすると思うのかい？ まあ、前例があったりしたから、疑うんだろうけどさ」

兄は今まで、友達是一人もいなかった。学校で勉強をずっとして兄が友達を作れるわけがない。兄は友人関係を捨てて、勉強のみを追求していたのだから。

「景さん、すみませー」

「謝らなくても良いよ。僕は気にしてないしね」

僕は謝まろうとしたが、景さんは僕を制してそう言った。

うん。この人になら、兄を任せられる。…って、なんかブラコンの妹みたいなこと言ってるな僕…

それから、僕と景さんは昼休み終了五分前まで話していた。兄のことや、僕のこと。それに景さんについても聞いた。話している最中、景さんはとても楽しそうだった。もちろん、僕も楽しんでいた。だが、話している内に、僕の頭に引かかるものがあった。しかし、それが何なのかはわからない。

「おっと、もうこんな時間か。そろそろ行かないと」

景さんがそう言って立ち上がった。僕も立ち上がる。

「じゃあ、またどこかで」

「あつ、すみません。最後に一つ、教えてくれませんか？」

景さんが戻ろうとした時、僕は景さんを引き留めた。

「うん、別にいいけど…何かな？」

振り返った景さんに僕は訊いた。

「兄のことをどう思います？」

景さんはその質問に少し驚いたようだったが、すぐに答えた。

「僕にとって、秀一は大切な人だよ」

景さんはそう言って、構内に戻っていった。兄の様子でも見に行

くのかもしれない。僕は再びベンチに腰掛ける。

「景さん…か」

呟いて、先ほど引つかかったことがなんなのか考える。

「ああ、そうか」

そのことがわかった僕は、思わずそう言っていた。講義があるからだろう、周りには誰もいなかった。

僕は帰ることにした。用事が済んでしまった以上、ここにいる意味はない。自転車に乗り、その場を離れる。

まあ、また景さんに会うときがあれば訊いてみよう。そう思いつつ、僕は家に帰っていった。

第四話 キャンパスライフ（後書き）

次の話も同じ日の話です。

第五話 サブの恋愛事情（前書き）

皆さん、お久しぶりです。更新が異常に遅くなりました。すいませ
んでした。今度はできるだけ早くします。

第五話 サブの恋愛事情

僕は家に戻ってきていた。あれから、そのまま遊びに行こうとも考えたのだが、家事が残っていることに気づいたためである。…最近、僕は主夫化してきているような気がする……

自転車を物置に強引に入れると、僕は玄関に向かいつつ、鍵を取り出した。そして鍵を差し込みひねったが、手応えがない。

「鍵…かけた、よな？」

試しにドアを少し開けてみる。ガチャリと、ドアが少し開く。

……まさか、泥棒じゃ？ そう思った僕は、思い切って中に入ることにした。ドアノブをつかむ。そして、心の中でカウントダウンを始める。

3…2…1…0！僕はドアを一気に開けた。手応えが全くなかった。そして、中から何かが飛び出してきて、見事なヘッドスライディングを決めた。まあ、転んだのだろう。

僕は何も言えなかった。転んだ人を見ると、どうやら女の子のようだった。勿論、僕の家に女の子はいない。強いて挙げるならば母だが、今は実家に帰っている。じゃあ、この女の子は誰なんだろう？

そう疑問に思った時、家の中から大きな声が聞こえた。

「待てって、由香里！俺が悪かったからさ！」

この声は…秀三だ。あいつは、今日部活だったはずなのに、なんで家にいるんだろう？家の中から、小柄な少年が出てきた。秀三である。

「由香里、大丈夫か？」

そう言っ、秀三は由香里という女の子を起きあがらせる。由香里の服はかなり汚れていた。由香里は黙っている。というか、怒っているように見えるのは僕だけだろうか？そんな様子に気づいていない秀三はさらに話しかけた。

「大丈夫か、由香里。俺が悪かったよ。さあ戻ろっぜ」

手を取った瞬間にパンツと、いい音がした。由香里が秀三の手を振りほども、反対側の手で平手打ちを食らわせたのである。叩かれた秀三は呆然としていた。

「この…変態！」

秀三にそう言い放ち、由香里は逃げるように帰っていった。…秀三は雰囲気を読めない奴だなあ。とりあえず、僕は秀三に話しかけた。

「おい、秀三」

しかし、反応がない。目の前で手を振ってみるが、これにも反応がなかった。僕は本気で秀三の顔を殴ってみた。ドムツ！と鈍い音がして、秀三が玄関先に崩れ落ちた。我ながら良いパンチだった。僕が自己満足していると、秀三がムクリと立ち上がった。

「おお、秀三。気が付いたか」

僕は反応を取り戻した秀三に喜びを覚えた。秀三は下を向いていた。

「そつだ、お前今日部活じゃなかったのか？」

秀三は答えない。

「お前、またサボったのか。サボりはよくないぞ」

秀三はまた答えない。

「まったく…女の子を家に連れ込むなんて……ところで、あの子は彼女か？ お前、そのところを聞かせてもらっからな」

「兄貴、ちよつといいかな？」

秀三がこちらに歩いてくる。僕は黙って待っていた。やがて、秀三が僕の前に立つ。そして、僕の鳩尾に秀三の拳がめり込んだ。

「ぐえっ！」

思わず蛙のような声を出してしまう。呼吸が止まりそうになるほどの衝撃だった。僕は倒れこむ。秀三が笑いながら言った。

「なあ、兄貴よ。俺は機嫌が悪いんだ。何故かわかるか？」

僕は痛みに耐えつつ、首を振る。そんな僕を見て、秀三は顔をしかめて言う。

「由香里は帰っちまうわ、誰かにいきなり顔殴られるしょ。これで機嫌良かったらおかしいだろ？」

「まあ、確かにそうだな。僕が悪かった、すまない」

そんな僕を見た秀三は、ハアッと溜め息を吐いて呆れたように、「兄貴は怒んねえのかよ？」

と訊いた。僕は何のことだかわからなかったので首を傾げる。

「俺は兄貴を殴ったんだぜ？ 普通は殴り返したり、キレたりとかしないのか？」

「別に。まあ、確かに僕だって殴られたのは腹立つけど、先に殴ったのは僕だからね。それにいくら兄弟とはいえ、プライバシーに首を突っ込むのはよくなかった。結局、悪いのは僕なんだよ」

それを聞いた秀三は頭を抱えて、何か呟いていた。残念なことに聞こえなかったが。

僕は立ち上がると、秀三をその場に置いて、家の中に入っていた。さあて、掃除でもしよう。

玄関前では不審者のように、秀三がブツブツと呟いていた。近所の人達もそれを見て、コソコソと話していた。ウワサになることは間違いなさそうだった。

一日が終わる。明日もゆっくりできると思い、目覚まし時計はかけないでおく。僕はベッドの上に置きっぱなしの携帯を取り、画面を見る。

「んっ……？ メール来てんじゃん」

内容を見ると、どうやら速人からのようだ。明日、駅前に十時集合らしい。僕は、わかったと短いメールを返した。そして、目覚まし時計を八時にセットする。電気を消し、枕元にセットした目覚まし時計を置いて、ベッドに横になる。

ふと、父さんのことを考えた。父さんはどこで、何をしているのだろうか？ 浮気相手とどこかのホテルにいるのか、もしくは母の実家にいるのか。どちらにしても、連絡くらいはして欲しい。そう思

った時、僕は眠りに落ちた。

その頃、秀三は自分の部屋で携帯を手に取り、何度も何度も電話やメールをしていたが、いずれも返答はなかった。

「くそっ！ 由香里の奴、シカトしやがって……」

腹が立った秀三は携帯を叩きつけようとしたが、かろうじて思いとどまった。

秀三は携帯をベッドに放り出した。そして床に座り、由香里のことを考える。

「やっぱ、早すぎたかなあ……」

思わず呟いてしまう。秀三が由香里と付き合い始めたのは、今から一週間前のことだった……

放課後、秀三は友達に呼び出され、屋上に向かっていた。どういう訳か知らないが、その呼び出しは口頭ではなく、メールで伝えられた。

「同じクラスなんだから、口で伝えるよな……まあ、その場じゃ言えないようなことだったんだろうがよ」

そして、屋上のドアの前に立つ。秀三はノブに手を掛け、ゆっくりと回し、そのまま引いた。ギョーッと錆び付いているドアが開く。夏にしては、爽やかな風が吹いていた。夕焼けに染まる空、思わず眩しくて、目を閉ざす。

「来て……くれたんだ」

そんな声が、光の射す方から聞こえた。秀三はそちらの方を見ようとすると、目を開けることはできなかった。

「誰だ？」

秀三は友人ではない声に驚きつつも訊く。

「由香里だよ、サブ」

ちなみにサブというのは、秀三のあだ名である。もちろん『三』から来ているものだ。

「由香里？ ……アイツは…どうした？」

「来ないよ。私はアイツに携帯借りただけ」

由香里が笑いながら言う。アイツ、確か由香里のこと、好きだったよな……。秀三は友人のことを可哀想だと思った。

太陽が雲に隠れ、由香里の顔が見えた。いつも通り、由香里は綺麗だった。さすが入学当初、クラス一番人気になっただけはあった。

由香里と今のようない関係になったのは、中一の時だった。

何人かで話をしていた際に、秀三と由香里のみわかる話題が出たことがきっかけだった。

それから由香里と話すようになった秀三は、いつしか、由香里のことを好きになっていた。その気持ちは今も変わらない。しかし、その気持ちは表に出さなかった。ただ単純に、ふられるのが怖かった。

だから友達でいようと思った。二人は友達という関係で、今までやってきた。

しかし最近、由香里への気持ちが抑えきれなくなってきた秀三は、緊張しつつも、由香里が話し出すのを待った。そして由香里が口を開く。

「いきなり呼んだりして、ごめん」

「いや、別にいいけど…」

いつもと調子が違う由香里に戸惑いを覚えた秀三は、

「お前、なんかおかしくね？」

思わず、そう聞き返していた。

「い、いや？ な～んにもおかしくないよ？」

「嘘つけ。声が裏返ってるし、少し噛んだじゃねえか」

しかも、この態度は由香里が秀三以外の生徒に使うものだ。つまり、普段は猫かぶりをしているのである。

「無理してんじゃねえよ、お前らしくない。言いたいことは、ストレートに言え、ストレートに」

秀三はできるだけ、軽い調子でそう言った。

「うるさいわね！ ちょっと黙ってて！ 私にだって、心の準備つてものがあるんだから！」

心の準備、ねえ……？

秀三は由香里の言いたいことがわかった気がした。場所、状況からいって間違いない。…由香里は告白する気なのだろう。

落ちついた由香里は口を開いた。

「あのさ…、私、サブのことがー」

「由香里！ 好きだ！」

由香里が言い終わる前に、秀三は叫んでいた。今まで抑えていた気持ちを解き放つように。

太陽が顔を出し、再び由香里がオレンジ色の光に包まれる。だが、秀三は目を由香里に向け、真っ直ぐ歩いていく。由香里の前まで行くと、由香里は泣いているように見えた。

「由香里、好きだ」

秀三は赤くなった顔でもう一度言ったが、由香里は何も言わなかった。

「由香里？」

秀三は心配になって声をかける。由香里はようやく口を開く。

「…バカ」

「バカってなんだよ、おい」

少し腹が立った秀三。しかし、由香里は違うのと首を振った。

「私から、先に言いたかったな…って」

秀三は顔がさらに赤くなる。そう思ってくれることが嬉しかった。

「私も好きだよ、サブ」

その言葉を聞いた秀三は、またさらに恥ずかしくなり、後ろを向いた。そして、一緒に帰ろうぜと言った気がしたが、

「一緒に帰ろうよ」

由香里がそう言った。こんな些細な同調がとても心地よかった。

そして秀三は黙ってドアまで歩きだした。それに続く由香里は秀三の20センチ後方にいた。今はこれでいい、秀三は思う。これからこの距離が狭めていけばいいのだ。何も焦る必要はない、そう考えをまとめた秀三は、由香里とともに屋上を出た。

二人の夏は始まったばかりだったのだが……

「はぁ……」

秀三は思い返したところで、溜め息をついた。あの時はこんなことになるなんて、思ってもいなかった。

「キスとか、まだ早かったな」

そう呟いた時、秀三の携帯から、軽快なポップ調の曲が聞こえた。秀三は携帯を急いで手に取り、着信相手を見た。由香里である。電話の通話ボタンを押し、電話にでる。

「もしもし……」

由香里の元気のない声が聞こえた。

「由香里、ごめんな」

秀三はすぐに謝った。自分が悪いのは理解していた。

「サブ…違うよ。私も悪かったの」

「何言ってるんだよ。悪いのは俺だろう？ お前は悪くない」

「違う！ 私はサブのことが好きなのに、サブが私にキスをしようとした時、私怖かった」

秀三は黙って聞いている。由香里の本心が知りたかった。

「怖くて怖くて、仕方なかった。なんだかサブが『男』なんだって、再確認させられた感じだった。ごめんね、サブ」

由香里は泣いていた。秀三は由香里を泣かせたことを後悔した。しかし後悔ばかりもしていられない。

「なあ、由香里」

呼びかけるが、由香里に返事はない。秀三は構わずに話を続ける。
「怖くて、当然なんだ」

「えっ……？」

「どんなに愛していても、怖い時は怖い。それが普通なんだ」

秀三は自分なりに、由香里を納得させるように話していた。

「もちろん、そう考えない人もいるかもしれない。でも、少なくとも俺はそう思う。だから、由香里は悪くない」

「サブ……」

「悪いのは俺だ。お前が怖いと思っていたことに気づきもしなかった。自分の欲望を優先した。だから、ごめん由香里」

由香里は黙っていたが、やがて口を開いた。

「もういいよ、サブ。私は気にしてないしさ。私のことを好きって思っていたから、キスしようとしたんでしょ？ それならいいよ」

「由香里……」

こうして二人は仲直りした。そして……

「十一時に駅前だからね。遅れないように。遅刻したら、何かおごってもらうから」

二人はデートをするようで、由香里は秀三に念を押す。秀三は何度も返事をしていった。

ちなみに長兄の秀一の明日の予定は、景とゲーセンに行く約束をしていた。集合時間は駅前に十二時。

兄弟三人の日曜日は忙しくなりそうだった。

第五話 サブの恋愛事情（後書き）

次は日曜日の話です。誰にスポットが当たるんでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1724b/>

君と行く明日。

2010年10月10日11時45分発行